



Title	『菜根譚』における三教の考察：日本で『菜根譚』はどのように読まれてきたのか
Author(s)	
Citation	令和3（2021）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書．2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和3年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな氏名	いがらし きお 五十嵐 妃桜	学部 学科	文学部人文学科	学年	3年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	湯浅 邦弘	所属	文学研究科		
研究課題名	『菜根譚』における三教の考察—日本で『菜根譚』はどのように読まれてきたのか				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
1. 研究目的・背景					
<p>『菜根譚』は、中国明代末頃に洪自誠によって書かれた処世訓である。日本では文政五（一八二二）年に初めて和刻本が出版されて以来、数多くの読者を得てきた。先行研究においては、その内容の特徴として、儒教を根幹としつつ、道教と仏教を柔軟に取り入れるといった、三教折衷である点が挙げられることが多い。しかし、その三教の思想体系の実態について詳細に考察した研究は、管見の限りあまりない。また、洪自誠は万暦三十年（一六〇二）に『仙仏奇踪』という書物を編纂している。本書は、仙人と仏祖の伝記や図、道教経典や語録などからの抜粋、仏祖の法語などを抜き書きしたものである。このことから、洪自誠は儒教を学びつつも、かなり道教と仏教に傾倒していたのではないかと予想される。このように、『仙仏奇踪』は、洪自誠の思想を考察する上で、重要な文献として位置づけることができる。にもかかわらず、『菜根譚』にまつわる研究において、『仙仏奇踪』という書物の存在については、従来あまり注意が払われてこなかった。しかしながら、『菜根譚』における儒教・道教・仏教の三教について考察する際には、洪自誠にとって道教と仏教がどのような位置づけにあったのかを知る手掛かりとして、『仙仏奇踪』についても考察する必要がある。これらを踏まえ、『菜根譚』と『仙仏奇踪』を組み合わせることで、『菜根譚』における三教（儒教・道教・仏教）の思想体系をより明らかにすることが、本稿の目的である。</p>					
2. 研究方法・経過					
<p>まず、儒教・仏教・道教について言及している条を中心に、『菜根譚』の原文を読み直し、先行文献での指摘を再検証した。具体的には、今井宇三郎『菜根譚』（明德出版社、1967）と湯浅邦弘『菜根譚』（中央公論新社、2010）を用いた。次に、『仙仏奇踪』についての書誌情報をまとめ、その編纂背景や、『菜根譚』との関わりについて考察したい。</p>					
3. 研究成果					
3. 1 先行研究					

『菜根譚』における三教について、今井宇三郎『菜根譚』(1967)と湯浅邦弘『菜根譚』(2010)の指摘をまとめ、再考を加えた。

3. 1. 1 今井宇三郎『菜根譚』の再考

今井氏は『菜根譚』の思想内容について、以下のように述べている。

この書に説かれている思想内容は、儒道仏三教の混融合一であるとよく云われるが、いわゆる三教合一思想ではなく、儒教思想を根底として、道仏二教を博引旁証したものと見るべきである。
(今井宇三郎『菜根譚』明德出版社、1967年、pp.17)

さらに続けて、このように「儒教思想を根底として、道仏二教を博引旁証したもの」であるとする理由としては、①書中に引用する語句に、儒家先賢の著書のものが最も多いこと、②後集中で洪自誠が「吾儒」と称していること、③題詞の于孔兼の記述から、洪自誠が儒家であると推測されること、これら三つを挙げている。ここでは、三教への言及があると推測される②「吾儒」について該当する条を調査し、再検証を行ないたい。

「吾儒」が含まれる条には、後集六二条、後集一二四条、後集一三四条の三例がある。『菜根譚』が合計三五七条からなることを踏まえると、三例は多いとは言えないことがわかる。また、いずれの条も後集に含まれていた。後集は世俗から離れた境地について述べる条が多く、その中で「吾儒」と述べることの意義や意図についても考察する必要があると言える。以下では、各条について、今井氏(1967)による書き下し文と現代語訳を引用して考察したい。

◎後集六二条

【原文】古徳云、竹影掃階塵不動月輪穿沼水無痕。吾儒云、水流任急境常静、花落雖頻意自閑。人常持此意、以應事接物、身心何等自在。

【書き下し文】古徳云ふ、「竹影階を掃ふも塵動かず、月輪沼を穿つも水に痕なし」と。吾が儒云ふ、「水流急に任せて境常に静かなり、花落つること頻りなりといへども意おのづから閑なり」と。人常に此の意を持して、もつて事に応じ物に接すれば、身心なんらの自在ぞ。

【現代語訳】昔の名僧が言っている。「風に吹かれて揺れる竹の影が、しきりにきざはしを掃くが、もとより影であるからきざはしの塵は少しも動きはしない。月の光の輪が沼の水面に映って、ちょうど沼を穿っているようであるが、もとより影であるから水に跡を残しはしない」と。また、わが儒者は言う。「水の流れは激しいが、あたりは常に静かである。また、花はしきりに落ちるけれども、それを眺めている心は自然にのどかになる」と。この心境を持ち続けて、外境にわずらわされないようにして、物事に当たってゆくことができれば、なんと身も心ものびのびとすることであろう。

(今井宇三郎『菜根譚』明德出版社、1967、pp.249, 250)

この条は、「古徳」と「吾儒」を引いて、外境に煩わされない心境を持つことの重要性について説いている。今井氏の注釈によると、「古徳」とは昔の名僧のことを指し、引用されている句は唐の祖燈禪師志璿の語であり、普燈録にあるという。つまり、「古徳」以下は禅宗の言葉として述べられている。ここで「吾儒」と述べることは、ただ「儒」と言うよりも、儒教の意義を強調する効果があると考えられる。しかし、これと同時に、「吾儒」が「古徳」よりも後に述べられているということに着目した

い。後に述べる一三四条においても、同様の配列がみられる。

◎後集一二四条

【原文】栽花種竹、玩鶴觀魚、亦要有段自得處。若徒留連光景玩弄物華、亦吾儒之口耳、積氏之頑空而已、有何佳趣。

【書き下し文】花を栽ゑ竹を種ゑ、鶴を遊び魚を観るも、また段の自得するところを要す。もしいたづらに光景に留連し、物華を玩弄せば、また吾が儒の口耳、積氏の頑空のみ、何の佳趣あらん。

【現代語訳】花や竹を植えたり、鶴と遊び魚を見るという、いかにも隠者らしい生活をするにしても、一段と心に悟るものが、まずなくてはならぬ。そうではなくて、もしただ眼前の光景におぼれ、景色をもてあそぶだけであれば、わが儒者のいう口耳の学であり、仏教でいう頑空でしかない。なんの妙味もありはしない。

(今井宇三郎『菜根譚』明德出版社、1967、pp.303, 304)

この条は、「吾儒之口耳」と「積氏之頑空」という言葉を用いて、それらしいことをしていても、心に得ることがないような、中身のない状態を諷めている。儒教と積氏の言葉が同時に用いられているという点では、先にみた後集六二条と同様である。ただ、本条においては、「吾儒之口耳」が「積氏之頑空」よりも先に述べられている。最後に、後集一三四条を確認する。

◎後集一三四条

【原文】積氏随縁、吾儒素位、四字是渡海的浮囊。蓋世路茫茫、一念求全、則萬緒粉起。随寓而安、則無入不得矣。

【書き下し文】積氏の随縁、吾が儒の素位、四字はこれ海を渡るの浮囊なり。けだし世路は茫茫として、一念全きを求むれば、すなはち万緒粉起す。寓に随ひて安んずればすなはち入るとして得ざることなし。

【現代語訳】仏教の「随縁」と、わが儒教の「素位」、この四字は、人生の世渡りで、欠かすことのできない浮き袋のようなものである。考えてみると、人生航路は、広々として果てしもなく、一つのことに完全であることを求めようとする心が生ずると、それに従ってあらゆる欲念が乱れ起きるものである。そこで、いま仮に置かれている境遇に従って心を安んじておれば、将来どんな境遇に置かれても、安心を得られないということは決してない。

(今井宇三郎『菜根譚』明德出版社、1967、pp.312, 313)

この条は、『菜根譚』を結ぶ条であり、洪自誠の思想を考える上で重要なものだと言える。ここでは、「積氏随縁」と「吾儒素位」の四字を、「海的浮囊」と喩えて、その価値を強調している。「素位」とは、分相応に身を処することであり、「随縁」とは、因縁に従うことである。先にみた後集六二条と同様に、「吾儒」が「積氏随縁」よりも後に述べられている。

『菜根譚』と同年代に著わされた書物に、『呻吟語』というものがある。著者である呂坤も、洪自誠と同様に、儒家でありながら仏教や道教を柔軟に取り入れたことで知られている。その『呻吟語』における「吾儒」の用例として、品藻篇に以下のような文がある。

明道受用處、陰得之佛、老、康節受用處、陰得之莊、列、然作用自是吾儒。蓋能奴僕四氏、而不為其所用者。此語人不敢道、深於佛、老之莊、列者自然默識得。

(正田啓佑『呻吟語』 明德出版社、1977、pp.200, 201)

この条は、儒者の名前を挙げ、陰に仏教や道教の影響を受けつつも、彼らの学問工夫が作用するのは儒学のそれとしてだと述べている文である。この例からも、「吾儒」という言い回しは、あくまで儒学を中心に据えるときに用いられる表現であることがわかる。

にもかかわらず、『菜根譚』後集六二条と後集一三四条において、「吾儒」が仏教よりも後に置かれるのはなぜなのだろうか。もちろん、記述する順番について、特に配慮しなかったという可能性は排除できない。しかし、『菜根譚』のほとんどの条が対句構造を取っており、文章構成への十分な配慮がなされているということと、後集一三四条が『菜根譚』における最後の条であることなどを踏まえると、その可能性は極めて低いと考えられる。「釈氏」を先に置いたのは、今井氏や湯浅氏が指摘するように、洪自誠が学による区別なしに三教を学んでいたことに加え、それぞれを相対化して取り入れ、彼自身の考えを語っているということを示しているのではないだろうか。つまり、この条であれば一文目の引用が着目されることが多いが、実際は洪自誠の思想が表われているのは、二文目「蓋世路茫茫、一念求全、則萬緒粉起。隨寓而安、則無入不得矣。」においてである。これは「蓋」という語からも明らかである。また、先賢の語を引用した上で自身の主張を述べるというのは、一般的な手法である。したがって、「吾儒」と述べているのは、儒学の徒であると称するためではなく、儒教から学んだということ述べるために、ひいては儒教からの引用であることを明示するための前置きだと言えるのではないだろうか。また、たとえこの配列に特に意図がなかったのだとしても、儒教と仏教を排他的なものとして捉えておらず、それぞれ一思想として相対化し、その考えを取り入れていたと推測できるのではないだろうか。

3. 1. 2 湯浅邦弘『菜根譚』の再考

湯浅氏は洪自誠と仏教・道教の関係について、以下のように述べている。

『菜根譚』の、特に後集には、道家や仏教の思想が色濃く見られ、「無」や「空」の思想まであと一步のところまできている条もある。だが、洪自誠は、ぎりぎりのところで踏みとどまり、道家や仏教とは一線を画している。(中略)さらには、明快に仏教や道教を批判する条もある。たとえば、後集一二九には、こうある。

みだらな女性はあたりも顧みずに尼になり、ものごとくに熱中する男性は、思いつめて仏道に入る。清らかであるべき仏門が、常にみだらでよこしまな男女の集会所になっているのは、このようである。

(中略) 洪自誠は、仏教・道教の思想を認めながら、決して盲信することなく、あくまで是々非々の態度で臨んでいるのである。

(湯浅邦弘『菜根譚』 中央公論新社、2010年、pp.22, 23)

湯浅氏の指摘する通り、この後集一二九条のように、『菜根譚』の中には仏教や道教への批判と取れる条もみられる。しかし、これは「洪自誠は儒学の徒である」ということを前提した解釈であるとも言える。既に述べた通り、洪自誠は『仙仏奇踪』を編纂するほど、仏教・道教に精通していた。また、先の考察からは、洪自誠が儒学や仏教・道教といった学の区別にとらわれず、それらを相対化して取

り入れていたことが明らかになった。これらを踏まえると、後集一二九条は儒家として仏教・道教を批判している条ではなく、仏教・道教に深く傾倒する者としての、一定の客観性を有した、仏道と仏門の荒廃に対する嘆きの条であると読み直すことが可能なのではないだろうか。

3. 2 後集一〇三条の意義

これまで、「3. 1. 1 今井宇三郎『菜根譚』の再考」と「3. 1. 2 湯浅邦弘『菜根譚』の再考」において、『菜根譚』においては儒教・仏教・道教が相対化されていることと、そのことによって、儒教という枠組みにとらわれず、洪自誠自身の考えが語られている可能性があることを指摘した。しかし、『菜根譚』には、仏教・道教の言葉を明確に批判していると理解できる条が存在する。それが、後集一〇三条である。

◎後集一〇三

【原文】心無其心、何有於觀。釈氏曰觀心者、重増其障。物本一物、何待於齊。莊生曰齊物者、自剖其同。

【書き下し文】心に其の心無ければ、何ぞ観に有らん。釈氏の心に観ずと曰う者は、重ねて其の障を増す。物は本一物なりて、何ぞ齊するを待たん。莊生の物を齊しくすると曰う者は、自ら其の同を剖く。

【現代語訳】心に邪念妄想がなければ、どうして観心（心を観ずること）の必要があろうか。釈迦が観心をことさらに説くのは、かえってその支障を増すだけだ。万物はもともと一物であり、どうして等しくする必要などあろうか。莊周（莊子）がことさらに物を齊しくするなど説くのは、みずからその同一性を引き裂くようなものだ。

（湯浅邦弘『菜根譚』中央公論、2010、pp.208, 209）

右に示したように、後集一〇三においては、「釈氏曰観心」と「莊生曰齊物」がそれぞれ明確に批判の対象となっている。三教を柔軟に取り入れる姿勢を示す『菜根譚』において、稀な例であると言える。そのため、ここでは、この後集一〇三条が『菜根譚』において持つ意義について、考察したい。

既に述べたように、洪自誠は儒教をも一つの学問として学び、仏教・道教にも深く傾倒していた。そのことを踏まえて、仏教・道教批判という観点ではなく、洪自誠独自の考えが読み取れる条であるという観点から読み直すことにより、新たな発見があるのではないだろうか。先に結論を述べると、ここから読み取れるのは、あれこれ語ったり嫌ったりしないことに、「真意」を見出すという思想である。『菜根譚』後集の始めに位置する一条は、以下のような内容である。

◎後集一条

【原文】談山林之樂者、未必眞得山林之趣。厭名利之談者、未必盡忘名利之情。

【書き下し文】山林の楽しみを談ずる者は、いまだ必ずしも真に山林の趣をえず。名利の談を厭ふ者は、いまだ必ずしも、ことごとく名利の情を忘れず。

【現代語訳】都塵を離れたいなかの生活の楽しみを、あれこれと新らしく語る者は、まだ、ほんとうに山林に閑居した生活のおもむきを会得している者とはかぎらない。また、ことさらに名声や利欲の話の聞くことをきらう者は、まだ、全く名利を求めようとするところを忘れ去っている者とかかぎらない。

（今井宇三郎『菜根譚』明德出版社、1967、pp.201）

この条は、後集の始めに位置することから、後集全体を貫くテーマが示されている可能性が高いと考えられる。この条について、郭氏は次のように述べている。

無欲・淡泊である道家の隠逸思想は、「清」と思われ、当時の多くの文人たちが憧れていた。しかし「清」と見せかける隠者と本当は「清」になり切れない貪欲な文人がいて、この一条では作者は指摘したのである。ここでは「真」と「清」をはっきりさせようという作者の意図が見てとれる。

(郭莉莉、筑波大学外国語教育論集 27 号 2005 年 3 月、pp.80)

郭氏は本論文において、明代晩期の清言小品に共有される主題として、「真の追求」があると述べており、『菜根譚』をその一例として取り上げている。郭氏によると、「小品」とは韻を踏まない形式が中心となる「散文」のことであり、明代・清代の「小品」の形式の一つに「清言」がある。また、「清言」には厳密な定義は存在しないが、一般的には短くかつ内容的に警句のようなものを「清言」としていた(郭 2005、pp.77)。

このように、三教という観点以外から『菜根譚』を考えた場合でも、「真意」の追求が大きなテーマとして掲げられているということがわかる。

3. 3 『仙仏奇踪』の編纂について

『仙仏奇踪』は、明代末の万暦三〇年(一六〇二)に洪自誠によって編纂された。道教経典や道士の語録、仏祖の法語からの抜粋によって構成されていて、「消搖墟」「寂光境」「長生詮」「無生訣」の四編から構成されている。内容としては、洪自誠自身の言葉が述べられている部分は管見の限りない。このように書き抜きによってのみ構成されているということは、先に考察したように、語らないことに意味を見出していた洪自誠ならではの編纂手段だったと言えるのではないだろうか。

3. 4 日本における受容について

『菜根譚』は文政五年に和刻本として刊行されたあと、日本において多くの読者を得た。湯浅氏は『菜根譚』(二〇一〇)において、釈宗演『「菜根譚」講話』(一九二三)など、僧侶による解説書が見られることから、『菜根譚』が仏典に準じる扱いを受けていたと言えるのではないかと述べている。釈宗演とは、安政六年(一八五九)に高浜町若宮に誕生し、京都の妙心寺、建仁寺、鎌倉円覚寺等で修行をした禅宗の僧侶である。釈宗演は『菜根譚』について以下のように述べている。

「洪自誠の傳記に就いては、薩張、世の中に知られて居ない。唯、該書によつて見ると、儒、佛、道の三教に出入して、能く三教の精華を發揮し、言々、世態人情に通じて委曲を悉さざるなく、句々、玄に入り微を穿つて、所謂、百煉千磨の寸鐵、光芒の陸離たるものがある。誠に修養書中の第一に推すべきものであらう。」

(釈宗演『「菜根譚」講話』1923:『菜根譚叢書第七巻』2013、pp.2)

このように、「誠に修養書中の第一に推すべきものであらう。」と述べ、『菜根譚』を高く評価していることがわかる。また、「三教の精果を發揮し」たものであると認識しており、仏教の内容を含んでいることが『菜根譚』を評価する唯一の理由ではなかったということがわかる。

3. 5 まとめ

本稿では、『菜根譚』における三教のあり方について考察した。先行研究において指摘されていた「吾儒」と仏教・道教批判の条について再検討することで、三教という枠に留まらない洪自誠の思想を垣間見ることができた。それは、真意を見出すことの重要性を説くというものであった。また、先行研究においても、清言小品という視点から同様に「真」の追求というテーマが存在することを指摘されていた(郭氏 2005)。この「真」というテーマは、『仙仏奇踪』が書き抜きのみで構成されていることとも繋がりを持つのではないかと考えられる。また、日本において仏教関係者にも受容された理由としても、三教に共通する思想としての「真意」の追求という主題が、『菜根譚』において見出されたという背景があったのではないだろうか。

4. 今後の課題

本研究の当初の目的は、『菜根譚』における三教について、その関係性を見直すことであった。しかし、三教の優位性や構造については、資料から客観的に考察できるものではなく、極めて勝手な考察に留まってしまった。また、そもそも、『菜根譚』と『仙仏奇踪』のどちらが先に著わされたのかが、明らかになっておらず、考察の前提となる条件に課題があった。また、日本における『菜根譚』の受容について、推測の域を出なかった。『菜根譚』には、主に日本で普及した明朝本と、中国において読まれた清朝本があり、それぞれ全体の構成や文章の内容など大きく異なる。今回の研究から、これらの違いについて考察することの必要性に気付くことができた。『菜根譚』と『仙仏奇踪』の成立年代について、また『菜根譚』の版本の異同について調査することも必要だとわかった。これらについて調査することを今後の課題としたい。

5. 参考文献・資料一覧

- ・今井宇三郎『菜根譚』(明德出版社、1967)
- ・今井宇三郎『菜根譚』(岩波書店、1975)
- ・湯浅邦弘『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典菜根譚』(角川ソフィア文庫、2014)
- ・湯浅邦弘『菜根譚』(中公新書、2012)
- ・釈宗演『「菜根譚」叢書 第七巻 菜根譚講話』(『「菜根譚」叢書」第七巻、大空社、2013)
- ・疋田啓佑『呻吟語』(明德出版社、1977)
- ・北野良枝『「仙仏奇踪」の書誌学的研究』(駒沢大学『文化』第25号、2007年3月)
- ・荒木見悟「于孔兼をめぐる人びと」(東洋古典学研究第12集 2001年10月 pp.51-67)
- ・呂宗力著、中村璋八訳「菜根譚の作者の本籍と版本の源流についての考察」(駒沢大学外国語部論集 31号 1990年3月 pp.1950-202)
- ・郭莉莉「明代晩期の清言小品と『真の追求』ということについて」(筑波大学外国語教育論集 27号 2005年3月 pp.77-87)
- ・大竹健介「「仙佛奇蹤」解讀」(武蔵大学人文学会雑誌第27巻第1号 1995年、pp.15-158)
- ・「釈宗演を顕彰する会ホームページ『釈宗演とは』

<http://wakasa-takahama.jp/shakusoven/about.html> (最終閲覧 2021年12月18日)